

北海道中学校のソフトテニス指導者の指導価値志向と 部活動の地域移行化ビジョン

Instructional Value Orientation of Hokkaido Junior High School Soft Tennis Coaches and Vision of Regional Transition of Intramural Sport Club

小 峯 秋 二¹⁾ 川 西 正 志¹⁾ 竹 田 唯 史¹⁾
KOMINE Shuji KAWANISHI Masashi TAKEDA Tadashi

I. 緒 言

国内の青少年スポーツの基盤である中学校運動部活動（以下、部活動）は、歴史的転換を迎えようとしている。部活動は、中学生の人格形成や、学校の活性化、教員の資質向上、力量形成等の教育的効果に寄与してきた。現在、国内の約6割の中学生が部活動でスポーツ活動を実践しているが、日本発祥のスポーツであるソフトテニス部には約30万人の中学生が所属しており、日本中学校体育連盟（以下、中体連）への男女合計加盟生徒数は、長年にわたって第1位となっている（中体連，2021）。そして、そのうちの約23万人の中学生が競技会への参加を目的として、日本ソフトテニス連盟に会員登録をしている（日本ソフトテニス連盟，2021）。これらの中学生競技者の指導は、顧問を勤める中学校教員が中心的役割を担ってきた。しかし、中学校教員の約6割が「過労死ライン」を超えていることが明らかとなり（文部科学省，2017）、教員の働き方改革を目的とした部活動改革は、2017年4月に「運動部活動指導

員」が制度化されたことを皮切りに矢継ぎ早に推進されてきた。2018年3月には「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」が発出され、学校と地域が協働・融合した形での地域におけるスポーツ環境整備を進めることが示された（スポーツ庁，2018a）。2019年1月には「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について」の「答申」が発出され、部活動の指導は、学校の業務ではあるが、必ずしも教師が担う必要のない業務となり、学校単位から地域単位の取組にし、学校以外が担うことも積極的に進めるべきであると示された（中央教育審議会，2019）。2020年9月には「学校の働き方改革を踏まえた運動部活動改革」が発出され、休日の部活動の段階的な地域移行のスケジュールが示された（スポーツ庁，2020）。2021年10月には「運動部活動の地域移行に関する検討会議」が設置され、2022年6月には「提言」が提出された。この提言では、「少子化の中、将来にわたりわが国の子供たちがスポーツに継続して親しむこ

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

とができる機会の確保していくため」の課題と対応策が示されている（スポーツ庁，2022）。そして，同年12月には「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン」が発出され，①学校部活動，②新たな地域クラブ活動，③学校部活動の地域連携や地域クラブ活動への移行に向けた環境整備，④大会等の在り方の見直しについて示されており，「中学生の発達段階やニーズに応じた多様な活動ができる環境を整備」していくことが求められている（スポーツ庁ほか，2022）。

わが国のスポーツは，常に「体育」として存在してきたため，わが国のスポーツ価値意識は，「体育という客体の性能によって表現される教育的な制度的価値によって規範化された意識」であり，ある意味では「強制的・抑圧的」なスポーツ価値意識と言える（菊ほか，2014 a）。とりわけ，部活動では「最後まであきらめず目標に向かって頑張ること」や「この試練を乗り越えて成長すること」といった教育的な価値しか認めてこない傾向にあり，スポーツの「楽しさ」や「喜び」といったスポーツがもつ社会的価値は重視されてはこなかった（菊ほか，2014 b）。上杉（1977，1985，1989）は，わが国のスポーツ価値意識を「世俗内禁欲型」「アゴン型」「レクリエーション型」「レジャー型」の4つに類型化し，一流競技の指導者は，禁欲志向を特徴としている「世俗内禁欲型」と「アゴン型」に分化していること。一流競技の指導者は，一流競技の選手よりも「世俗内禁欲型」が多いこと。そして，一流競技の指導者は「世俗内禁欲型」の一つである「苦しみのスポーツ価値意識」の「鍛錬主義・精神主義・全力主義」への意

識が高いことを明らかにしている。これら一流競技の指導者の「言説」や「美談」は，良くも悪くも多くの指導者に影響を与えてきた。そして，「競技スポーツ」を通じた「人間形成」を名目に，指導者のニーズや指導価値志向を重視した「強制的・抑圧的」な部活動は，時に悪しき勝利至上主義や行き過ぎた生徒指導へと発展し，体罰や暴言，ハラスメント等の温床となってきた。これらの影響は，現代の指導者にも脈々と受け継がれている可能性は否めず，2021年度には33件の体罰が部活動で発生し，中学生の心身に影響を与えている（文部科学省，2021）。また，部活動には多様な「スポーツ経験・競技レベル・ニーズ」が交錯しているだけではなく，子どもたちのスポーツ志向は，構造的な変化と同時に「フェア・公平性」を重視する姿勢から「ベスト・技能」を重視する姿勢へと変化し「勝利・成功」の重要性が増していく（Webb，1969）。しかし，指導者の9割は，スポーツ指導者資格をもっていない状況や，多くの指導者は「校務が忙しく思うように指導ができない」「自分自身の実技指導力の不足」と感じていることが報告されている（日本スポーツ協会，2021）。そのため，部活動にて「生徒の多様なキャリアや志向などを念頭に教育課程との関係を工夫したり，目先の競技成績にとらわれず，生徒の長期的なスポーツキャリア全体を視野に入れたコーチング（スポーツ庁，2013）」を実践し「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力（スポーツ庁，2018 b）」を育てていくことは極めて困難な状況にあり，地域のスポーツクラブとの連携・協働は，わが国のスポーツの方向性を考える上では避けては通れない道であ

る。部活動の地域移行に関する先行研究では、総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型SC）に関するものが多く見受けられる。しかし、大竹ほか（2001）は、すべての部活動を総合型SCへと完全融合することは不可能であること。また、川西ほか（2022）は、休日の部活動の地域移行化の受け皿となれる総合型SCは、全体の約1割しかないことを報告している。そのため、「中学生の発達段階やニーズに応じた多様な活動ができる環境を整備」していくためには、「部活動」と多様な実施主体で構成される「地域クラブ」が連携・協働し、地域の特性に応じたネットワークを構築しつつ、指導者を確保していくことが求められよう。しかし、指導者の指導価値志向によって地域移行化ビジョンは異なることが予想される。指導者の指導価値志向と地域移行化ビジョンとの関連について検証していくことは有意義な営みであるが、これらに着目した先行研究はみられない。そこで、本研究では、北海道の中学校ソフトテニス部指導者の指導価値志向と指導行動及び地域移行化ビジョンとの関連性を検証し、さらに指導者の年代別特徴について明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象

調査は、2022年8月上旬から9月上旬にかけて、北海道中学校ソフトテニス部指導者516名を対象に、webアンケート調査を実施した。回答者は154名、回収率は29.3%であった。調査に際し、インフォームド・コンセントを行い、同意を得た上で調査を実施した。本研究は、北翔大学大学院・北翔大学・北翔

大学短期大学部研究倫理審査委員会の承認を受けた（承認番号：HOKUSHO-UNIV：2022-003）。

2. 用語の定義

永木ら（1997）は、スポーツ価値志向について、各種スポーツに内在する文化的価値に基づいた実践者の価値判断や価値基準と定義しており、また、見田（1966）は、価値について、主体の欲求をみたす客体の性能であると定義している。本研究における指導価値志向とは、これらの先行研究を参考に、スポーツに内在する文化的価値に基づいた指導者の欲求をみたす運動部活動指導の価値判断や価値基準と定義した。

3. 作業仮説

- 仮説1. 指導価値志向によって、地域移行化の方法は異なる。
- 仮説2. 指導価値志向によって、地域移行化の範囲は異なる。
- 仮説3. 年代別指導価値志向によって、地域移行化の方法は異なる。
- 仮説4. 年代別指導価値志向によって、地域移行化の範囲は異なる。

4. 分析項目

調査項目は、個人属性、指導価値志向と指導行動、地域移行化ビジョン、地域移行化の阻害要因などで構成した。指導価値志向については、Webb（1969）のスポーツへの態度の専門化尺度を参考に、神谷（2015）のレクリエーション価値志向の考え方を加え、指導者の指導価値を特定するために択一方式を設定した。分析は、統計処理ソフトSPSS

い指導者。指導年数は、11年以上20年以下の指導者。競技実績は、競技実績のない指導者。指導実績は、都道府県大会に出場している指導者が最も多いことが明らかとなった。

2. 指導行動

表2は、対象者の指導行動を表している。部活動の役職では、正顧問を務めている指導者（115名）が最も多く、指導対象者では、男性・女性の両方を指導している者（80名）、中学生だけを指導している者（140名）が最も多かった。指導日は、ほとんどの者が、平日と休日の両方で指導（147名）をしており、1回の指導時間は、120分以下の者（57名）と180分以上の者（53名）の者が多く、1日の平均指導時間は、152.8分±36.5であった。年間の指導日数は、260日以上（67名）が最も多く、年間の平均指導日数は、220.9日±60.0であった。指導価値志向では、「選

手がそれぞれの目標を達成すること」を目的としたベスト志向（以下、ベスト志向）を選択した者（77名）が最も多く、「礼儀やルール、マナーの遵守や人間形成」を目的としたフェア志向（以下、フェア志向）を選択した者（50名）、「勝利や競技力の向上」を目的とした勝利志向（以下、勝利志向）を選択した者（22名）の順であり、「楽しむこと」を目的としたレクリエーション志向（以下、レクリエーション志向）を選択した者（5名）は、極めて少数であった。以上から、指導者の指導行動については、部の役職は正顧問の指導者。指導対象者は、男女両方の中学生を指導している指導者。指導日は、平日と休日の指導を実施し、1回の指導時間は、120分以下と180分以上の指導者。年間指導日数は、260日を超えている指導者。指導価値志向は、ベスト志向の指導者が最も多いことが明らかになった。また、レクリエーション志向の指導者は極めて少なかった。

表2. 指導行動

項目	n	%	平均値	SD	項目	n	%	平均値	SD
役職					指導時間（1回）				
正顧問	115	74.7			120分以下	57	37.0		
副顧問	20	13.0	-	-	121分以上179分以下	44	28.6	152.8	36.5
部活動・外部指導員	14	9.1			180分以上	53	34.4		
指導対象者（性別）					指導日数（年間）				
男性	26	16.9			200日以下	49	31.8		
女性	48	31.2	-	-	201日以上259日以下	38	24.7	220.9	60.0
両方	80	51.9			260日以上	67	43.5		
指導対象者（年代）					指導価値志向				
中学生のみ	140	90.9	-	-	勝利志向	22	14.3		
中学生と他年代	14	9.1			レクリエーション志向	5	3.2		
指導日					ベスト志向	77	50.0		
平日のみ	1	0.6			フェア志向	50	32.5		
休日のみ	6	3.9	-	-					
平日と休日	147	95.5							

3. 地域移行への意思

表3は、対象者の運動部活動の地域移行化への意思を表している。運動部活動の地域移行化については、賛成群（88名）が最も多く、反対群（28名）を大幅に上回っていた。地域移行化後も指導者として参加する意思を示している者（94名）は、参加しない意思を示している者（60名）を、大幅に上回っていた。地域移行化の方法については、市区町村の競技団体中心の中学生のニーズに応じたクラブチーム（以下、競技団体クラブ）を選択した者（45名）が最も多く、外部指導者等を活用して学校教育内で実施する（以下、学校教育内）を選択した者（43名）、スポーツ少年団を拡大したクラブチーム（以下、スポーツ少年団）を選択した者（25名）、学校教員中心の指導者のニーズに応じたクラブチーム（以下、学校教員クラブ）を選択した者（20名）

の4つの方法で、全体の85%を上回っていた。地域移行化の範囲は、近隣の中学校の範囲で実施（以下、近隣中学校区）を選択した者（63名）が最も多く、次に、中学校区（48名）、市区町村単位（43名）という順であった。地域移行化への阻害要因（複数回答可）については、指導者への資格等に関すること（109名）が最も多かった。以上から、対象者の地域移行化の意思については、運動部活動の地域移行化に賛成している指導者が最も多いこと、地域移行後も、指導者としての参加意思を示している指導者が最も多いこと、地域移行化の方法としては、競技団体クラブを選択している指導者が最も多いこと、地域移行化の範囲としては、近隣中学校の範囲を選択している指導者が最も多いこと、地域移行化の阻害要因としては、指導者資格を選択している指導者が最も多いことが明らかとなった。

表3. 地域移行化への意思

項目	n	%	項目	n	%
地域移行について			地域移行化の範囲		
賛成群	88	57.1	中学校区	48	31.2
わからない	38	24.7	近隣中学校	63	40.9
反対群	28	18.2	市区町村単位	43	27.9
指導者としての参加意思			阻害要因（複数回答）		
参加しない	60	39.0	指導者資格	109	28.4
参加する	94	61.0	運営面での財源	84	21.8
地域移行化のビジョン			行政との連携	59	15.3
学校教育内で実施	43	28.0	保護者負担	61	15.8
競技団体クラブ	45	29.2	地域スポーツ協会との連携	38	9.9
学校教員クラブ	20	13.0	少子化	32	8.3
スポーツ少年団クラブ	25	16.2	その他	2	0.5
その他	21	13.6			

4. 指導価値志向と指導年数

指導価値志向に関連する分析については、レクリエーション志向の者が極めて少数であったため、分析では、レクリエーション志向を省いて実施した。表4は、指導価値志向と指導年数についてクロス集計をした結果である。χ²検定を行ったところ、統計的有意差がみられた(χ²(4)=2.05, p=N.S.)。各指導価値志向の特徴をみていくと、勝利志向群は、11年以上の者(10名)が最も多く、次に、4年以上10年以下の者(7名)が多かった。ベスト志向群は、11年以上の者(37名)が最も多く、次に、4年以上10年以下の者(24名)が多かった。フェア志向群は、4年以上10年以下の者(29名)が最も多く、約6割を占めていた。次に、11年以上の者(15名)が多かった。以上から、勝利志向群とベスト志向群には、11年以上の指導者が最も多いこと、フェア志向群には、4年以上10年以下の指導者が最も多いことが明らかとなった。

5. 指導価値志向と指導実績

表5は、指導価値志向と指導実績についてクロス集計をした結果である。実績なしを含む市町村大会出場までのレベルを、指導実績低群。北海道大会出場のレベルを指導実績中群。全国大会出場以上のレベルを、指導実績高群に分類した。χ²検定を行ったところ、統計的有意差はみられなかった(χ²(4)=1.26, p=N.S.)。各指導価値志向の特徴をみていくと、勝利志向群は、指導実績中群の者(9名)と指導実績高群の者(9名)が最も多かった。ベスト志向群は、指導実績中群の者(33名)が最も多く、次に、指導実績高群の者(25名)が多かった。フェア志向群は、指導実績中群の者(22名)が最も多く、次に、指導実績高群の者(16名)が多かった。以上から、勝利志向群には、指導実績の中群と高群の指導者が多いこと。ベスト志向群には、指導実績の中群の指導者が最も多いこと。フェア志向群には、指導実績の中群の指導者

表4. 指導価値志向と指導年数

変数	全体	3年以下		10年以下		11年以上		X ² (4)	P
	n	n	%	n	%	n	%		
勝利志向	22	5	22.7	7	31.8	10	45.5		
ベスト志向	77	16	20.8	24	31.2	37	48.0	9.94	0.04
フェア志向	50	6	12.0	29	58.0	15	30.0		

注) n=149, p<0.05

表5. 指導価値志向と指導実績

変数	全体	低群		中群		高群		X ² (4)	P
	n	n	%	n	%	n	%		
勝利志向	22	4	18.2	9	40.9	9	40.9		
ベスト志向	77	19	24.7	33	42.8	25	32.5	1.26	0.87
フェア志向	50	9	18.0	22	44.0	19	38.0		

注) n=149, p=N.S.

が最も多いことが明らかとなった。

6. 指導価値志向と年間指導日数

表6は、指導価値志向と年間指導日数についてクロス集計をした結果である。 χ^2 検定を行ったところ、統計的有意差はみられなかった($\chi^2(4)=3.40$, $p=N.S.$)。各指導価値志向の特徴をみていくと、勝利志向群は、260日以上実施している者(11名)が最も多く、5割を占めていた。次に、200日以上260日未満の者(8名)が多かった。ベスト志向群は、260日以上実施している者(38名)が最も多く、次に、200日以上260日未満の者(26名)が多かった。フェア志向群は、200日以上260日未満の者(23名)が最も多く、次に、260日以上実施している者(17名)が多かった。以上から、勝利志向群とベスト志向群には、260日以上実施している指導者が最も多いこと。フェア志向群には、200日以上260日未満実施している指導者が最も多いことが明らかと

なった。

7. 指導価値志向と1日の指導時間

表7は、指導価値志向と1日の指導時間についてクロス集計をした結果である。 χ^2 検定を行ったところ、統計的有意差はみられなかった($\chi^2(4)=4.51$, $p=N.S.$)。勝利志向群は、3時間以上実施している者(9名)と2時間半程度の者が最も多かった。ベスト志向群は、3時間以上実施している者(29名)が最も多く、次に、2時間程度実施している者(28名)が多かった。フェア志向群は、2時間程度実施している者(21名)が最も多く、次に、3時間以上実施している者(15名)が多かった。以上から、勝利志向群には、3時間以上実施している指導者と2時間半程度実施している指導者が最も多いこと。ベスト志向群には、3時間以上実施している指導者が最も多いこと。フェア志向群には、2時間程度実施している指導者が最も多いことが明らかとなった。

表6. 指導価値志向と年間指導日数

変数	全体	200日未満		200日以上260日未満		260日以上		X ² (4)	P
	n	n	%	n	%	n	%		
勝利志向	22	3	13.6	8	36.4	11	50.0	3.40	0.49
ベスト志向	77	13	16.8	26	33.8	38	49.4		
フェア志向	50	10	20.0	23	46.0	17	34.0		

注) n = 149, p = N.S.

表7. 指導価値志向と1日の指導時間

変数	全体	2時間程度		2時間半程度		3時間以上		X ² (4)	P
	n	n	%	n	%	n	%		
勝利志向	22	4	18.2	9	40.9	9	40.9	4.51	0.34
ベスト志向	77	28	36.4	20	26.0	29	37.6		
フェア志向	50	21	42.0	14	28.0	15	30.0		

注) n = 149, p = N.S.

8. 指導価値志向と地域移行化の方法

表8は、指導価値志向と地域移行化の方法についてクロス集計をした結果である。 χ^2 検定を行ったところ、統計的有意差はみられなかった($\chi^2(2)=6.83$, $p=N.S.$)。よって、仮説1は棄却された。勝利志向群は、学校教育内を選択した者(7名)が最も多く、次に、競技団体クラブを選択した者(4名)、学校教員クラブを選択した者(4名)が多かった。ベスト志向群は、競技団体クラブを選択した者(26名)が多く、次に、学校教育内を選択した者(20名)が多かった。フェア志向群は、学校教育内を選択した者(15名)が多く、次に、競技団体クラブを選択した者(14名)が多かった。以上から、勝利志向群には、今後も、学校教育内で実施していくことを求めている指導者が最も多いこと、ベスト志向群には、競技団体クラブへの移行方法を求めている指導者が最も多いこと、フェア志向群には、今後も、学校教育内で実施していくことを求めて

いる指導者が最も多いことが明らかとなった。

9. 指導価値志向と地域移行化の範囲

表9は、指導価値志向と地域移行化の範囲についてクロス集計をした結果である。 χ^2 検定を行ったところ、統計的有意差はみられなかった($\chi^2(2)=1.38$, $p=N.S.$)。よって、仮説2は棄却された。勝利志向群は、若干、近隣中学校区を選択した者(8名)が多く、次に、中学校区を選択した者(7名)、市区町村単位を選択した者(7名)が同じ程度選択していた。ベスト志向群は、近隣中学校区を選択した者(30名)が最も多く、次に、中学校区を選択した者(24名)が多かった。フェア志向群は、近隣中学校区を選択した者(24名)が最も多く、次に、中学校区を選択した者(14名)が多かった。以上から、勝利志向群、ベスト志向群、フェア志向群には、近隣中学校区の範囲での移行を求めている指導者が最も多いことが明らかとなった。

表8. 指導価値志向と地域移行化の方法

変数	全体		学校教育内		競技団体クラブ		学校教員クラブ		スポーツ少年団		その他		$X^2(8)$	P
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%		
勝利志向	22		7	31.8	4	18.2	4	18.2	2	9.1	5	22.7		
ベスト志向	77		20	26.0	26	33.8	10	13.0	14	18.2	7	9.0	6.83	0.56
フェア志向	50		15	30.0	14	28.0	4	8.0	9	18.0	8	16.0		

注) $n=149$, $p=N.S.$

表9. 指導価値志向と地域移行化の範囲

変数	全体		中学校区		近隣中学校		市区町村単位		$X^2(4)$	P
	n	%	n	%	n	%	n	%		
勝利志向	22		7	31.8	8	36.4	7	31.8		
ベスト志向	77		24	31.2	30	39.0	23	29.8	1.38	0.85
フェア志向	50		14	28.0	24	48.0	12	24.0		

注) $n=149$, $p=N.S.$

10. 年代別指導価値志向と地域移行化の方法

表10は、年代別の勝利志向と地域移行化の方法について、クロス集計をした結果である。 χ^2 検定を行ったところ、統計的な有意差はみられなかった ($\chi^2(4) = 6.58$, $p = N.S.$)。35歳以下の勝利志向群は、競技団体クラブを選択した者(3名)と学校教員クラブを選択した者(3名)が、最も多かった。36歳以上の勝利志向群は、学校教育内を選択した者(5名)が最も多く、次に、スポーツ少年団(2名)が多かった。表11は、年代別のベスト志向と地域移行化の方法について、クロス集計をした結果である。 χ^2 検定を行ったところ、統計的な有意差はみられなかった ($\chi^2(4) =$

8.14, $p = N.S.$)。35歳以下のベスト志向群は、学校教育内を選択した者(9名, 29.0%)が最も多く、次に競技団体クラブを選択した者(7名)と、学校教員クラブを選択した者(7名)が多かった。36歳以上のベスト志向群は、競技団体クラブを選択した者(19名)が最も多く、次に、学校教育内を選択した者(11名)が多かった。表12は、年代別のフェア志向と地域移行化の方法について、クロス集計をした結果である。 χ^2 検定を行ったところ、統計的な有意差がみられた ($\chi^2(4) = 13.51$, $p = N.S.$)。そのため、仮説3は一部採択された。35歳以下のフェア志向群は、学校教育内を選択した者(13名)が最も多く、半数を占

表10. 年代別勝利志向と地域移行化の方法

変数	全体		学校教育内		競技団体クラブ		学校教員クラブ		スポーツ少年団		その他		X ² (4)	P
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%		
35歳以下	9	22.2	2	33.3	3	33.3	3	0.0	0	0.0	1	11.2	6.58	0.16
36歳以上	13	38.4	5	7.7	1	7.7	1	2	15.4	4	30.8			

注) n = 149, p = N.S.

表11. 年代別ベスト志向と地域移行化の方法

変数	全体		学校教育内		競技団体クラブ		学校教員クラブ		スポーツ少年団		その他		X ² (4)	P
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%		
35歳以下	31	29.0	9	22.6	7	22.6	7	4	12.9	4	12.9	8.14	0.09	
36歳以上	31	22.6	7	48.3	15	6.5	2	6	19.4	1	3.2			

注) n = 149, p = N.S.

表12. 年代別フェア志向と地域移行化の方法

変数	全体		学校教育内		競技団体クラブ		学校教員クラブ		スポーツ少年団		その他		X ² (4)	P
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%		
35歳以下	26	50.0	13	26.9	7	7.7	2	3	11.6	1	3.8	13.51	0.01	
36歳以上	24	8.3	2	29.2	7	8.3	2	6	25.0	7	29.2			

注) n = 149, p < 0.05

めていた。次に、競技団体クラブを選択した者（7名）が多かった。36歳以上のフェア志向群は、競技団体クラブを選択した者（7名）が最も多く、次に、スポーツ少年団を選択した者（6名）が多かった。以上から、35歳以下のベスト志向群とフェア志向群、36歳以上の勝利志向群には、今後も、学校教育内で実施していくことを求めている指導者が最も多いこと。35歳以下の勝利志向群には、競技団体クラブと学校教員クラブを移行方法として求めている指導者が多いこと。36歳以上のベスト志向群とフェア志向群には、競技団体クラブを移行方法として求めている指導者が多いことが明らかとなった。

11. 年代別指導価値志向と地域移行化の範囲

表13は、年代別勝利志向群と地域移行化の範囲について、クロス集計をした結果である。 χ^2 検定を行ったところ、統計的有意差はみられなかった ($\chi^2(4) = 4.79$, $p = N.S.$)。35

歳以下の勝利志向群は、中学校区を選択した者（5名）が多く、次に、近隣中学校区を選択した者（3名）が多かった。36歳以上の勝利志向群は、市区町村単位を選択した者（6名）が最も多く、次に、近隣中学校区の範囲を選択した者（5名）が多かった。表14は、年代別ベスト志向群と地域移行化の範囲について、クロス集計をした結果である。 χ^2 検定を行ったところ、統計的有意差はみられなかった ($\chi^2(4) = 3.01$, $p = N.S.$)。35歳以下のベスト志向群は、中学校区を選択した者（13名）が最も多く、次に、近隣中学校区を選択した者（11名）が多かった。36歳以上のベスト志向群は、近隣中学校区を選択した者（19名）が最も多く、次に、市区町村単位を選択した者（16名）が多かった。表15は、年代別ベスト志向群と地域移行化の範囲について、クロス集計をした結果である。 χ^2 検定を行ったところ、2変数には、統計的有意差がみられた ($\chi^2(4) = 22.41$, $p < 0.05$)。よって、仮

表13. 年代別勝利志向と地域移行化の範囲

変数	全体		中学校区		近隣中学校区		市区町村単位		X ² (4)	P
	n	%	n	%	n	%	n	%		
35歳以下	9		5	55.6	3	33.3	1	11.1	4.79	0.09
36歳以上	13		2	15.4	5	38.5	6	46.2		

注) n = 149, p = N.S.

表14. 年代別ベスト志向と地域移行化の範囲

変数	全体		中学校区		近隣中学校区		市区町村単位		X ² (4)	P
	n	%	n	%	n	%	n	%		
35歳以下	31		13	41.9	11	35.5	7	22.6	3.01	0.22
36歳以上	46		11	23.9	19	41.3	16	34.8		

注) n = 149, p = N.S.

表15. 年代別フェア志向と地域移行化の範囲

変数	全体		中学校区		近隣中学校区		市区町村単位		X ² (4)	P
	n		n	%	n	%	n	%		
35歳以下	26		13	50.0	13	50.0	0	0.0	22.41	0.01
36歳以上	24		1	4.2	11	45.8	12	50.0		

注) n = 149, p < 0.05

説4は一部採択された。35歳以下のフェア志向群は、中学校区を選択した者(13名)と近隣中学校区を選択した者(13名)が、ともに全体の半数をしめていた。36歳以上のフェア志向群は、市区町村単位を選択した者(12名)が最も多く、次に、近隣中学校区を選択した者(11名)が多かった。以上から、35歳以下のすべての指導価値志向群には、中学校区の範囲での移行を求めている者が最も多いこと。36歳以上の勝利志向群とフェア志向群には、市区町村単位での移行を求めている指導者が最も多いこと。ベスト志向群には、近隣中学校区の範囲での移行を求めている指導者が最も多いことが明らかとなった。

IV. 考察

1. 指導価値志向と地域移行化ビジョン

本調査の結果から、北海道ソフトテニス部指導者の指導価値志向は、ベスト志向群の指導者が最も多く半数を占めており、次に、フェア志向群、勝利志向という順に多く、レクリエーション志向の指導者は極めて少なかったことが明らかとなった。そのため、レクリエーション志向の指導者を省いて、勝利志向群、ベスト志向群、フェア志向群について、各地域移行化ビジョンと指導者の特徴を整理す

る。勝利志向群は、近隣中学校区の範囲で、学校教育内での実施を求めている指導者が最も多かった。指導者の特徴としては、指導経験年数は、11年以上の指導者が多く、指導実績は、高群と中群の指導者が多かった。年間指導日数は、260日以上実施している指導者が多く、1日の指導時間は、3時間以上実施している指導者と2時間半程度実施している指導者が多かった。次に、ベスト志向群は、近隣中学校区の範囲で、競技団体クラブへの移行方法を求めている指導者が最も多かった。指導者の特徴としては、指導経験年数は、11年以上の指導者が多く、指導実績は、中群の指導者が多かった。年間指導日数は、260日以上実施している指導者が多く、1日の指導時間は、3時間以上実施している指導者と2時間半程度実施している指導者が多い傾向がみられた。フェア志向群は、近隣中学校区の範囲で、学校教育内での実施を求めている指導者が最も多かった。指導者の特徴としては、指導経験年数は、4年以上10年以下の指導者が多く、指導実績は、中群の指導者が多かった。年間指導日数は、200日以上260日未満実施している指導者が多く、1日の指導時間は、2時間程度実施している指導者が多い傾向がみられた。これらのことから、勝利志向群とベスト志向群の両群には、指導

者経験年数が長く、指導実績が中群以上の者が多いこと、年間指導日数が多く、指導時間が長い者が多いことが示唆された。また、フェア志向群の指導者には、指導経験年数は、比較的短く、指導実績も中程度であり、年間指導日数や指導時間は、適当である指導者が多い傾向がみられ、近隣中学校区の範囲で、学校教育内での実施を求めている指導者が多いことが示唆されたが、指導経験年数以外は、統計的有意差はみられなかった。その要因としては、対象者の9割以上が中学校教員であるため、中体連が事業として主催している「全国的な中学校体育大会」を、チームの目標として掲げている指導者が多いことが考えられる。中澤（2021）は、部活動における「競技」と「教育」との関係性について中体連の形成過程から再考しており、「教育と競技の関係性は、必ずしも二項対立的なものではなく、競技によって教育が達成されるのであり、そのために競技団体ではなく自らが主体となって競技大会システムを積極的に取り込まねばならなかった」と述べている。ソフトテニスには、1979年から開催されている全国中学校体育大会夏季大会の正式競技であるため、これらに関連づけて「中体連主催」の大会を目標としている指導者が多いと推察する。また、ソフトテニスの競技スポーツとしての側面では、「勝利を追求しようとする人は、きびしい試練に耐えながら、ひたすら努力して、それが人間形成に繋がり、スポーツのきびしさを人生観にまで高めることができる（石井ほか、1975）」といった精神主義的な理想が求められてきた。そのため、指導者には「競技スポーツによる」という点が共通していると考えられ、指導経験年数が比較的長く、指導

実績の高い指導者が、「勝利や競技力の向上」を目的とした勝利志向や、「選手がそれぞれの目標を達成すること」を目的としたベスト志向を選択していること、指導経験年数が比較的短く、指導実績の低い指導者が、「礼儀やルール、マナーの遵守や人間形成」を目的としたフェア志向を選択していることが示唆された。そのため、「競技」ではなく「楽しむこと」を目的としたレクリエーション志向の指導者が極めて少数であると推察する。他方、部活動には、対人関係のリテラシーの育成、自己指導能力の育成、いじめや不登校の未然防止等において、生徒指導上の重要な機能を果たしている（川口、2019）。そのため、仁木（2010）が指摘している「教育的効果の高い部活動を、学校から切り離した場合には、学校教育力の低下だけではなく、中学生の問題行動は激増していく可能性」という状況を危惧している指導者が、フェア志向群の指導者に多い可能性についても言及しておく。

2. 年代別指導価値志向と地域移行化ビジョン

次に、年代別の指導価値志向と地域移行化ビジョンについて見てみると、35歳以下の勝利志向群は、中学校区の範囲において、競技団体クラブと学校教員クラブを選択している者が多く、36歳以上の勝利志向群は、市区町村単位において学校教育内とスポーツ少年団を選択している者が多かった。35歳以下のベスト志向群は、中学校区の範囲で、学校教育内を選択している者が多く、36歳以上のベスト志向群は、近隣中学校区の範囲で、競技団体クラブを選択している者が多かった。35歳以下のフェア志向群は、中学校区及び、近隣中学校区の範囲において、学校教育内を選択

している者が多く、5割を占めていた。36歳以上のフェア志向群は、地域移行の範囲では、市区町村の範囲と近隣の中学校区の範囲を選択している者が多く、競技団体クラブとスポーツ少年団を選択している者が多かった。そのため、35歳以下の勝利志向群の指導者は、「競技スポーツ」による「勝利や競技力の向上」を目的とした指導を、中学校区の範囲において競技団体クラブや学校教員クラブに移行し実施していくことを求めている指導者が多いこと。また、36歳以上の勝利志向群の指導者は、今まで通り、学校教育内で実施していくことを求めている指導者と市区町村単位の範囲においてスポーツ少年団活動に移行して実施していくことを求めている指導者が多いことが示唆された。次に、35歳以下のベスト志向群の指導者は、「競技スポーツ」による「選手がそれぞれの目標を達成すること」を目的とした指導を、今まで通り、学校教育の一環として実施していくことを求めている指導者が多いこと。36歳以上のベスト志向群の指導者は、近隣中学校の中学範囲において競技団体クラブで実施していくことを求めている指導者が多いことが示唆された。次に、35歳以下のフェア志向群の指導者は、「競技スポーツ」による「礼儀やルール、マナーの遵守や人間形成」を目的とした指導を、今まで通り、学校教育の一環として実施していくことを求めている指導者が多いこと。36歳以上のフェア志向群の指導者は、学校教育から切り離して競技団体クラブやスポーツ少年団の活動で実施していくことを求めている指導者が多いことが示唆された。また、35歳以下のフェア志向群には、部活動に生徒指導上の教育的効果を求めている指導者が最も多いと推察する。

IV. まとめ

本研究では、北海道の中学校ソフトテニス部指導者の指導価値志向と指導行動及び地域移行化ビジョンとの関連性を検証し、さらに指導者の年代別特徴について明らかにすることが目的であった。勝利志向とベスト志向は大同小異であるが、勝利志向の若年層の指導者とベスト志向の高年層の指導者は、「競技」の外部化を求めており、勝利志向の高年層の指導者とベスト志向の若年層の指導者は、現状維持を求めている指導者が多いことが明らかとなった。また、フェア志向の若年層の指導者は、「教育」の現状維持を求めており、フェア志向の高年層の指導者は、「教育」の外部化を求めている指導者が多いことが明らかとなった。青柳（2021）が実施した調査では、小学校の部活動の地域移行における指導や運営のマイナス面について「練習日数・時間が守られない」ことや「教育的配慮が不足している」といった内容が報告されている。中学校で指導する北海道のソフトテニス指導者では、何らかのスポーツ指導者資格を保有している者は極めて少数である。関（2020）は、「スポーツにおける一連の不祥事は、勝利至上主義が批判の標的になるのではなく、本来は、スポーツマンがもつ目的／価値が評価され批判されるべきである」と指摘している。そのことは、今回の地域移行化への指針の中で、指導者の偏ったスポーツへの価値観の傾倒をいかに生涯スポーツ的視点に立った価値観に変える指導の在り方が問われていることは確かである。

VI. 研究の限界

本研究の対象者の9割以上が、中学校教員であったため、部活動指導員や外部指導者からの回答は今後の検討課題である。また、北海道の都市部と急激に過疎化が進む周辺地域によって指導者の人的資源の確保の難しさについてもばらつきがあるため、今後は、地域の特性に応じた地域移行化ビジョンとの関連についても多角的に検討することが課題としてある。

文 献

- 青柳健隆 (2021) 小学校における運動部活動からスポーツ少年団への移行に伴う変化-地域移行を経験した教員へのインタビュー調査から, 体育学研究66: 63-75.
- 石井源信・西田豊明 (1975) 実践軟式テニス, 大修館書店: 東京, pp.11-13.
- 上杉正幸 (1977) スポーツ価値意識論の方向性, スポーツ参与の社会学研究 (6): 193-209.
- 上杉正幸 (1985) 大学生のスポーツ価値意識について (4) - 価値意識の類型化 -, 香川大学教育学部研究報告 I (59): 1-19.
- 上杉正幸 (1989) わが国における一流競技選手と指導者の意識のズレに関する分析, 香川大学教育学部研究報告 I (75): 109-134.
- 大竹弘和, 上田幸夫 (2001) 地域スポーツとの「融合」を通じた学校運動部活動の再構築, 日本体育大学紀要第30巻記念特別号 (2): 269-277.
- 神谷拓 (2015) 運動部活動の教育学入門-歴史のダイアローガー-, 大修館書店: 東京, pp. 268-283.
- 川口厚 (2020) 中学校運動部活動における生徒指導上の機能に関する研究, 関西学院大学教育学研究科博士論文.
- 川西正志・山田奈美江・荻裕美子・川西司 (2022) 総合型地域スポーツクラブにおける部活動の地域移行化への対応意識-SC全国ネットワーク加盟クラブについて-, 日本生涯スポーツ学会第24回大会抄録集: 30.
- 菊幸一・茂木宏子・功刀梢 (2014) 1. 体育・スポーツ社会学からみたスポーツ価値意識研究の現状と課題. 木村和彦「編」, 新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発 (第1報). 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ: 5-31.
- 下竹亮志 (2022) 運動部活動の社会学-「規律」と「自主性」をめぐる言説と実践-, 新評論: 東京, pp.295-309.
- スポーツ庁 (2018) 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/03/19/1402624_1.pdf. (参照日2022年11月26日)
- スポーツ庁 (2020) 学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について. https://www.mext.go.jp/sports/content/20200902-spt_sseisaku01-000009706_3.pdf. (参照日2022年12月1日)
- スポーツ庁 (2022) 運動部活動の地域移行に関する検討会議提言. https://www.mext.go.jp/sports/content/20220722-spt_ori para-000023182_2.pdf, (参照日2022年12月1日)

- 関朋昭 (2020) 勝利至上主義に対する批判の反証－スポーツの定義と価値から－, 北海学園大学経営論集17 (3) : 117-129.
- 中澤篤史 (2021) 中学校体育連盟の形成過程 (1947-1967) - 運動部活動における教育と協議の関係性を再考する -, 体育学研究 66 : 497-514.
- 永木耕介・鶴林幸喜・千駄忠至・山崎俊介・藪根敏和 (1997) 柔道実践者のスポーツ価値志向に関する実証的研究－特に伝統性と近代性の視点から－, 武道学研究30 (2) : 1-8.
- 仁木幸男 (2010) 中学校の部活動の教育的効果に関する研究－歴史的考察と調査研究－, 早稲田大学大学院教育研究科博士学位審査論文.
- 日本スポーツ協会 (2021) 学校運動部活動の実態に関する調査. https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/katsudousuishin/doc/R3_gaiyoban.pdf. (参照日2022年12月1日)
- 日本ソフトテニス連盟 (2021) 事業報告書. <https://www.jsta.or.jp/wp-content/uploads/schemes/jihou2021.pdf>. (参照日2022年11月16日)
- 日本中学校体育連盟 (2021) 加盟校・加盟生徒数調査. <https://nippon-chutairen.or.jp/cms/wp-content/themes/nippon-chutairen/file/kameikou/>, (参照日2022年11月16日)
- 文部科学省 (2016) 教員勤務実態調査. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/09/27/1409224_005_1.pdf. (参照日2022年11月26日)
- 文部科学省 (2019) 新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について－答申－. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985.htm. (参照日2022年12月1日)
- 文部科学省 (2020) 体罰の実態把握について. https://www.mext.go.jp/content/20211220-mxt_syoto01-000019568_007.pdf. (参照日2023年1月7日)
- 見田宗介 (1966) 価値意識の理論, 弘文堂 : 東京.
- Webb, H. (1969) Professionalization of attitudes towards play among adolescents. *Aspects of Contemporary Sport Sociology* : 161-178.